

「洗礼者ヨハネの宣教」

2015年04月29日

ルカによる福音書 3章7節～14節。そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

洗礼者ヨハネは権威あるエルサレム神殿を去り、イスラエル人の信仰の原点である荒野に立った。そして、旧約の預言者たちのいでたちであるらくだの毛衣を着、革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物とした禁欲生活の中から、悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。罪を悔い改め、新たに生まれ変わる洗礼を迫ったのである。ヨハネの身を挺した、真実で激しい説教は人々の心を捉え、洗礼を授けてもらおうと人々は続々と集まって来た。その時、ヨハネは「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」と叱責した。この言葉は、マタイ福音書にはファリサイ派やサドカイ派の墮落した宗教者に対して怒った言葉であると記している。悔い改めに相応しい実を結べ。我々の父はアブラハムだから、神の祝福は既に与えられているなどと考えるな。神は石ころからでも、アブラハムの子たちを起こすことができる。良い実を結ばない木はみな、根元に置かれた斧で切り倒され、火に投げ込まれる。ヨハネは、信仰には既得権などはなく、今ここで初々しく信じることであり、神への畏れを真っ直ぐに語ったのである。

群衆は「わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねると、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と、貧しい者、飢えた者たちに分け与えよと答えた。徴税人が「わたしたちはどうすればよいのですか」と問うと、「規定以上のものは取り立てるな」と、暴利を貪らず規定通りに取り立てよと答えた。兵士も「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねると、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と、ローマ帝国の力を盾に、金品をゆすり、だまし取らず、自分の給料で満足せよと答えた。

ヨハネの宣教は相互の愛と社会的正義を求める倫理的なものであった。罪とは困難にあえぐ者を無視することであり、社会的な公正から逸脱して、自分の利益を求めることである。これらの罪から離れ、愛と正義を生きることが悔い改めであった。これは、主イエスの福音とはかなり違っている。主イエスはもちろん飢え、渇く者への愛を語り、自分の利益に走る者を断罪している。しかし主イエスの福音は、倫理的要請ではなく、十字架と復活による「生の絶対的肯定」であった。この肯定から、命を分かち合うことを喜び、人間否定に対して激しく「ノー」を発するのである。